

# 家庭



働くことが楽しいというカティーボさん＝フィリピンで

## 3食食べて働ける。ごみの谷の笑顔

「ワン！」。英語で返答してくれた。61歳か。

フィリピンに足を踏み入れるまで、カンボジア、ニカラグア、エルサルバドルなど6カ国の、同じような場所を訪れた。どこでも気分はめいりがちだった。

しかし、カティーボさんのその笑顔は、私の気分を一変させた。どうして、そんな笑顔ができるのか。61年間精いっぱい生きてきた、その証しなのだろうか。

翌日、ごみ捨て場横に立つ彼女の家を訪ねた。「今の幸せだって？それはねえ、毎日3食食べることができて、働けることかな」

内戦に巻き込まれ、セブ島から流れ着いたのが12年前。あと何年、ここで働き続けるのだろうか。追いつめられた人々には、笑うことしか残されていないのかもしれない。

◇ うた・ゆうぞう フォトジャーナリスト。63年生まれ、神戸市在住。

1月の半ば、フィリピンのスモークキーバレー(ごみの谷)に初めて入った。

大きな麦わら帽子をかぶり、腰をかがめた少女が働いていた。近づいて、下からひよいと顔をのぞき込む。なんと、おばあさんだった。

「アノパガランモ(お名前は?)」。彼女の大きく開けた口には、

歯が一本もない。返事は声にならないかった。「クハハ、ハハハ」

覚えたばかりのタガログ語では通じないのか。声の調子を変えて、同じ質問を繰り返してみる。「ア・ノ・パ・ガ・ランモ」「クハハ、ハハハ」カティーボー!!(ハハハハ)「

おお、通じた。「イランタオンカナ(何歳ですか)」「シックスティ



宇田 有三